

## 「ヤコブとラバンの契約」

2021年04月16日

ラバンはまたヤコブに言った。「この石塚を見なさい。私がお前との間に立てたこの柱を見なさい。この石塚は証しであり、この柱もまた証しなのだ。害を加えようとして、私がこの石塚を越えてお前の方に行くことがなく、お前がこの石塚と柱を越えて、私の方に来ることがないためである。アブラハムの神とナホルの神、彼らの先祖の神が私たちの間を正しく裁いてくださるように。」(創世記 31 章 51 節～52 節)

ヤコブは一族を連れ、パダン・アラムで得た全ての財産を携え、岳父ラバンに知らせず、父イサクのいる故郷に向かって逃亡を図った。逃亡に気付いたラバンは追いかけて、ヤコブに激しく怒った。そして、家の守り神(テラフィム)を盗み出したことを激しく非難した。テラフィムは妻ラケルが盗み、らくだの鞍の下に置き、生理中だから立てないと言って、隠し通した。捜してもなかったことになり、立場が逆転した。ヤコブはラバンから受けた今までの酷い仕打ちを抗議した。ラバンは、ヤコブの仕事によって富を得ようと利用して来たので、返す言葉がなかった。

ラバンは怒りを収め、ヤコブの故郷への帰還を認めざるを得なかった。そこで、下記のように言い出した。「この娘たちは私の娘、この子どもたちは私の孫、この群れは私の群れ、いや、お前が目にするものはすべて私のものだ。しかし、この娘たちのために、あるいは娘たちが産んだ子どもたちのために、今日私がしてやれることは何だろう。そうだ、私とお前とで契約を結ぶことにしよう。それは私とお前との証しとなるだろう。」ヤコブの家族、蓄えた財産は、彼の愛と労働の成果であるが、ラバンはあくまで私のものだと言っている。しかし、契約を結び、互いの間での和解の証しとしようとして提案した。

ヤコブは石を取り、柱として立てた。また、一族の者に「石を集めてくれ」と言って、集めた石で石塚を作った。それから皆は、石塚の傍で和解の徴である共同の食事をした。ラバンは、アラム語(シリア語)で「エガル・サハドタ」、ヤコブは、ヘブライ語で「ガリエド」と呼んだ。「証しの小山」という意味である。また、「ミツパ(要害)」とも呼ばれた。それは、ラバンが、「私たちが互いに目の届かない所にいるとしても、主が私とお前との間を見張ってくださるように。お前が私の娘たちをひどい目に遭わせたり、私の娘たちのほかに妻をめとったりするようなことがあれば、たとえ私たちに知らせる者が誰もいなくても、神が私とお前との間の証人であるということをおきなさい」と言ったからである。ラバンは父親として、娘たちの安全と幸せを願っている。

ラバンはまたヤコブに言った。「この石塚を見なさい。私がお前との間に立てたこの柱を見なさい。この石塚は証しであり、この柱もまた証しなのだ。害を加えようとして、私がこの石塚を越えてお前の方に行くことがなく、お前がこの石塚と柱を越えて、私の方に来ることがないためである。アブラハムの神とナホルの神、彼らの先祖の神が私たちの間を正しく裁いてくださるように。」ヤコブとラバンとの間の契約は、要するに「不戦条約」である。当時の部族間の争いは親子でも気を許せないものであったことを示している。ヤコブは、不戦条約に父イサクの神にかけて誓った。ヤコブはいけにえを献げ、一同は食事をし、山で一夜を過ごした。ラバンは、朝早く起きて、孫と娘たちに口づけし、祝福して、自分の住まいに帰っていった。旅路の途中、ヤコブに神の使いたちが現れた。ヤコブは、彼らを見て、「これは神の陣営だ」と言って、「マハナイム」と名付けた。ヤコブは、20年の厳しい労苦から解放され、故郷への旅を続けた。